

映画による態度変容についての研究 (5)

—テレビ視聴態度の形成 その2—

石川 桂 司*

(1977年7月6日受理)

はじめに

わが国においてテレビ放送が始って以来20余年を経た昨年(1976年)、子どもに対するテレビの影響を憂い、問題を訴えた本が数冊出版された。

乳児の頃からテレビにかじりつき受動的に接し過ぎた幼児が、ことばの発育に遅れの傾向を示していることを警告した岩佐〔6〕の著作。

子どもの文化の質の向上を求め、その立場から今のテレビを子どもの敵として告発している「子どもの文化研究所」グループの指摘〔5・10〕。

テレビが子どもに受動性を強いる点と現在のテレビの商業主義を指摘し、子ども本位の良質のテレビを実現するために活動しているアメリカの市民団体 ACT¹⁾の運動を紹介したエブリン・ケイの訳書〔9〕。

これらのものが、昨年1年間のうちに、たて続けに出版された。

つまり、子どものための良いテレビ番組を求めることと同時に、家庭における児童のテレビ視聴実態の解明と、正しいテレビ視聴態度の形成が今日、最も必要とされているのである。

この研究は、「視聴覚教育研究第7号」に発表した論文〔4〕の発展として行われたものである。

この論文は、次の2つの部分から構成されている。

第Ⅰ部においては、子どものテレビ視聴実態を視聴時間量と視聴態度尺度値を示標としてとらえ、知能・性格・家庭環境など、これらにかかわる諸要因を分析した。

第Ⅱ部においては、テレビ視聴態度形成をねらいとしてつくられた道徳教育用映画「テレビに泣かれたボク」を利用して、その効果を明らかにしようとした。

I テレビ視聴態度の測定と視聴時間量

1 問 題

子どもとテレビの関係については、テレビ放送が開始されて以来数多くの研究が行われ、とくに、子どものテレビ視聴を規定していると思われる諸要因についての研究が内外において行われてきた。そして、これら諸要因の分析をとおして、望ましいテレビ視聴のあり方・番組のあり方を探ろうとするのがこれらの研究に共通しているねらいである。

* 岩手大学教育学部

1) Action for Children's Television

その主なものには、次のような研究がある。

- ① Himmelweit, H. T., Oppenheim, A. N. & Vince, P.; *Television and the Child*, Oxford Univ. Press, 1958
- ② Schramm, W., Lyle, J. & Parker, E. B.; *Television in the Lives of Our Children*, Stanford Univ. Press, 1961
- ③ 文部省; テレビジョン影響力調査, 1958~1962
- ④ 依田新編; テレビの児童に及ぼす影響, 東大出版, 1964
- ⑤ NHK総合放送文化研究所; 子どもの生活とテレビ (第I・II部16報告), 1969~1971

1954年, イギリスにおいてテレビが今日ほど普及していなかった頃, Himmelweitらはテレビ群と対照群を一对一比較法 (individual matching) で調査し, テレビ所有家庭の実態を前後比較法 (before-after study) で調べた。

彼女らのねらいは, テレビ視聴に影響する諸要因を明らかにすることによって, テレビの影響の基礎的諸原理を明らかにすることにあつた。そして, 子どもらに及ぼすテレビの影響を, テレビによって他の生活時間が奪われる「置き換え効果」(displacement effect) と「番組内容の影響」(effect of programme content) の2つの面から把握, その影響を, 年令・性別・知能・学力・社会階層などの要因から分析しようとした。

すなわち, テレビ視聴にかかわる諸要因を分析しようとした最初の研究とも言える。

Schrammらは, 1957年から60年にかけて, サンフランシスコやロッキー山脈地域, デンバーなどアメリカ各地とカナダで各種の調査を行なった。その中で Schrammらは, 最も長時間テレビを見る子どもらは何年生か, 知能はどうか, 家族の要因はどうなっているかなどについてふれている。

また, 昭和33年から行われた文部省テレビジョン影響力調査は, わが国におけるテレビ普及初期の研究で, 家庭にテレビが入ってから子どもの生活がどのように変化したかについて調べている。昭和34年には, 1日に3時間以上テレビを見る長時間視聴児群をとくにとりあげ, その視聴実態を分析している。

さらに, 日本民間放送連盟の委嘱を受けて行われた依田らの研究では, 幼児・児童らのテレビ視聴実態を, 年令・性別・家庭の階層別に分析し, テレビ視聴量と諸要因との関係を分析した。その結果, ホワイトカラー・小企業主・ブルーカラーという階層別に視聴時間が多くなっていること, 祖父母の有無・家庭の部屋数・親による視聴時刻の制限など, 家庭環境によって児童のテレビ視聴に差のあることが明らかにされている。

1957年・1959年の2回にわたって静岡市の児童を対象に調査したNHK放送文化研究所研究グループは, 1967年10月に第3次調査として大規模な調査を行なっている。

この研究は, わが国におけるこの種の研究としては最も大規模で, かつ多角的な分析が行われたものと言えるが, その全容は1969年4月から1971年3月にかけての16論文に発表されている。

その中から, 本稿に関連あると思われる内容の主なものを列挙してみると, 次のようなものがある。

- (1) 子どものテレビ視聴量は, 小学校3年生よりも5年生が多く, 女子よりも男子が多い。また, 知能・学力ともに, 上位のものよりも下位の子どもの視聴量が多い。
- (2) 長時間視聴児群と短時間視聴児群では, その生活時間構造が異っている (睡眠時間な

ど)²⁾。

(3) 視聴態度についてみると、勉強やテレビの時間をきめて計画的に見る子どもが42%、時間をきめないで無計画的に見る子どもが35%いる。無計画に見る子どもは、女子よりも男子に、知能・学力の高い子どもよりも低い子どもに多い。

(4) 親の視聴統制(指導)を「小言的統制」と「きまりの統制」にわけてみたとき、小言的統制群の子どもらは視聴量が多く、非自律的視聴をしているものが多い。これに対して、きまりの統制群の場合には、視聴量も少なく自律的視聴をしているものが多い。

本研究では、児童のテレビ視聴に関する以上の知見をもとに、今日の児童のテレビ視聴態度と視聴時間を調査測定し、その実態を諸要因と関連させながら明らかにしようと考えた。

2 調査の目的

児童の家庭におけるテレビ視聴実態について、視聴時間量(VH)と視聴態度尺度値(VA)〔3・4〕の測定を行い、この両者に、性差・地域差・学年差・学力(社会・算数)・性格(自主性・意志力)・家庭の視聴習慣などの諸要因が、どのように影響しているかを分析する。

3 調査の対象

岩手県内4小学校 3～6年生 計1,242名

(内訳)	3年	4年	5年	6年	計
住宅地域：盛岡市立松園小学校	137	114	108	84	443
商業地域： " 桜城小学校	129	123	147	149	548
農業地域： { 雫石町立御明神小学校	53	31	39	45	168
" 西根小学校	28	21	15	19	83
計	347	289	309	297	1,242

4 この研究でとりあげた要因

A 学校	I 学力(社会)
B 地域	J 家族数
C 学年	K 老人の有無
D 性格(自主性)	L 母が保育に専念しているか否か(共働きか否か)
E 性格(意志力)	M 家族の視聴時間量
F 知能	N 性別
G 家庭の職業	O 家庭での視聴統制
H 学力(算数)	P 家庭のテレビ台数

5 調査内容

A 児童対象の調査

(1) 視聴態度調査；サーストンの等現間隔法によって筆者(石川)が作成した態度測定尺度〔3・4〕。これによる測定値と児童の実際行動を示す視聴時間量との間に高い相関関係があることから、態度測定尺度として信頼性が高いものと考えられる。

2) この研究では、長時間視聴児を分布の上限35%以上、短時間視聴児を下限35%以下としている。

(2) 視聴時間量調査；NHK放送世論調査所実施の生活時間調査の方法によった（1日の全生活時間を15分きざみの時間目盛表に記入させる日記法）〔8〕。全学校・全児童の調査結果が同一条件によって比較されなければならないため、調査は金曜日に行われ、前日（木曜日）のテレビ番組に対する視聴行動を調べるように統一した。

(3) 学力検査（算数）；日本心理適性研究所編「小学校領域別診断学力検査B形式」。

(4) 学力検査（社会）；算数と同じ。

B 担任教師に依頼した調査

(1) 知能偏差値；各調査対象校で既に実施済の知能検査結果から転記を依頼した。

(2) 性格（自主性・意志力）の評定；各児童について、日常の生活ぶりから判断して、次の4項目についての評定を依頼した。

<自主性>

○ クラスの話し合いで意見がわかれたとき

〔3〕 自分が正しいと思えば、はっきり考え方を発表するほうである。

〔2〕 両方のよいところをとり入れた考え方を発表するほうである。

〔1〕 反対されると、自分の考えは言わないほうである。

○ むずかしくてなかなかできない宿題があったとき

〔3〕 参考書を調べて自分の力だけでやろうとする。

〔2〕 わかるところだけやっておく。

〔1〕 家の人か友だちに教えてもらう。

<意志力>

○ 自習時間に、うしろの席の友だちがおしゃべりをしているとき

〔3〕 かまわずに自分の勉強を続けるほうである。

〔2〕 シャベっている友だちに注意するほうである。

〔1〕 つい自分も友だちとおしゃべりをしてしまうほうである。

○ テストで、むずかしそうな問題があったとき

〔3〕 できそうがなくてもしんぼう強く考えるほうである。

〔2〕 つい、友だちの答をのぞこうとするほうである。

〔1〕 ちょっと考えてできそうがないと、すぐあきらめてしまうほうである。

C 家庭対象の調査

家庭調査票により、下記の事項について調査した（資料）。

(1) 家族数（問3）

(2) 老人の有無（問4）

(3) 母親が保育に専念しているか否か（問5）

(4) 家族の視聴時間量（問6）

(5) 家庭での視聴統制（問7・8）

(6) テレビ台数（問9）

6 調査時期

昭和51年11月1日から11月30日の間

7 結果の処理

調査結果についての統計的処理は、岩手大学工学部情報工学科菅野文友教授と同大学院生佐々木正幸君に依頼し、岩手大学電子計算機センターの計算機により処理を行なった。

8 調査結果とその分析

調査対象は、前述のように岩手県内の4小学校3～6年生合計1,242名であったが、16個の諸変数全部の数値のそろっている有効サンプルは、合計923名であった。

これらの調査データをコンピューターにより解析するために、次の要因と水準から分析した。

記号・水準番号の表示は、次の表のとおりである。

記号	要因	水準	備考
A	学校	4	1. 松園, 2. 桜城, 3. 御明神, 4. 西根
B	地域	3	1. 農村, 2. 商業, 3. 住宅
C	学年	4	1. 3年, 2. 4年, 3. 5年, 4. 6年
D	性格(自主性)	3	1. +, 2. 0, 3. - (5～6:+, 3～4:0, 2:-)
E	性格(意志力)	3	1. +, 2. 0, 3. - (5～6:+, 3～4:0, 2:-)
F	知能	3	1. 上, 2. 中, 3. 下 (上:偏差値55以上, 中:45～54, 下:44以下)
G	職業	4	1. サラリーマン, 2. 商, 3. 農, 4. 他
H	学力(算数)	3	1. 上, 2. 中, 3. 下 (知能と同じ)
I	学力(社会)	3	1. 上, 2. 中, 3. 下 (知能と同じ)
J	家族数	4	1. 2, 3, 4人, 2. 5人, 3. 6人, 4. 7人以上
K	老人の有無	2	1. 有, 2. 無
L	母の保育	2	1. 専, 2. 非専
M	視聴時間	3	1. 多, 2. 普, 3. 少 (:5時間以上, 普:2～4時間, 少:1時間以下)
N	性別	2	1. 男, 2. 女
O	視聴統制	4	1. きまり的統制, 2. 小言的統制, 3. 統制無し, 4. その他
P	テレビ台数	3	1. 1台, 2. 2台, 3. 3台以上

(1) 学校別・学年別・性別の比較

はじめに、データ全体について学校別・学年別・性別に比較したが、その結果は第1表のとおりである。

第1表 視聴態度尺度値(VA)と視聴時間量(VH)の平均値(学校別・学年別・性別の比較)

		3年			4年			5年			6年			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
松園小	<i>n</i>	49	29	78	32	40	72	43	39	82	36	25	61	160	133	293
	視聴態度値 VA	1.9677	1.8540	1.9254	1.9780	1.8705	1.9183	1.6403	1.6042	1.6231	1.8282	1.3355	1.6263	1.8504	1.6883	1.7768
	視聴時間量 VH	3.1225	2.9224	3.0481	3.1797	2.8625	3.0035	2.8372	2.4167	2.6372	2.6597	1.9500	2.3688	2.9531	2.5733	2.7807
桜城小	<i>n</i>	44	48	92	52	45	97	52	72	124	53	49	102	201	214	415
	視聴態度値 VA	1.8121	1.6310	1.7176	2.1736	1.6960	1.9520	1.6976	1.5586	1.6169	1.7351	1.5400	1.6414	1.8557	1.5995	1.7236
	視聴時間量 VH	3.1648	2.4583	2.7962	3.3269	2.7722	3.0696	3.1298	2.4271	2.7218	3.1840	2.3674	2.7917	3.2027	2.4930	2.8368
御明神小	<i>n</i>	22	25	47	15	13	28	17	16	33	20	18	38	74	72	146
	視聴態度値 VA	2.8646	2.2828	2.5551	2.3334	1.8075	2.0892	2.0364	2.0920	2.0634	2.2341	2.1811	2.2090	2.3963	2.1292	2.2645
	視聴時間量 VH	3.9205	3.3800	3.6330	3.0000	3.0192	3.0089	3.5000	3.8281	3.6591	3.8250	2.9861	3.4276	3.6115	3.3160	3.4658
西根小	<i>n</i>	12	11	23	6	11	17	7	6	13	7	9	16	32	37	69
	視聴態度値 VA	2.8144	2.8589	2.8357	2.4979	1.4999	1.8521	3.0215	1.4046	2.2752	1.5201	2.1340	1.8654	2.5172	2.0427	2.2628
	視聴時間量 VH	3.1042	2.3864	2.7609	3.5417	2.1136	2.6176	3.6786	2.2917	3.0385	2.9671	2.6389	2.7825	3.2819	2.3514	2.7829
合計	<i>n</i>	127	113	240	105	109	214	119	133	252	116	101	217	467	456	923
	視聴態度値 VA	2.1492	1.9520	2.0563	2.1554	1.7535	1.9506	1.8032	1.6292	1.7114	1.8371	1.6566	1.7530	1.9849	1.7450	1.8663
	視聴時間量 VH	3.2737	2.7743	3.0386	3.2476	2.7683	3.0035	3.1093	2.5864	2.8333	3.1187	2.3985	2.7835	3.1874	2.6349	2.9145
都市計	<i>n</i>	93	77	170	84	85	169	95	111	206	89	74	163	361	347	708
	視聴態度値 VA	1.8941	1.7150	1.8129	2.0991	1.7781	1.9376	1.6717	1.5746	1.6194	1.7728	1.4709	1.6357	1.8534	1.6335	1.7456
	視聴時間量 VH	3.1425	2.6331	2.9118	3.2708	2.8147	3.0414	2.9974	2.4234	2.6881	2.9719	2.2264	2.6334	3.0921	2.5238	2.8136
農村計	<i>n</i>	34	36	70	21	24	45	24	22	46	27	27	54	106	109	215
	視聴態度値 VA	2.8469	2.4588	2.6473	2.3804	1.6665	1.9996	2.3237	2.9045	2.1233	2.0490	2.1654	2.1072	2.4328	2.0998	2.2640
	視聴時間量 VH	3.6324	3.0764	3.3465	3.1548	2.6041	2.8611	3.5521	3.4091	3.4837	3.6026	2.8704	3.2365	3.5120	2.9886	3.2466

1) 学校別の比較では、都市校である松園小学校(住宅地域)・桜城小学校(商業地域)が、視聴態度尺度値(以下、VAと表わす)視聴時間量(以下、VHと表わす)ともに、農村校である御明神小学校・西根小学校に比べて少ない。

2) 学年別の比較では、VA・VHともに、5～6年生よりも3～4年生の方が多い。この点、前述のSchrammらの研究〔2〕で視聴時間量のピークが6・7年生であるという結果がでていて、また、文部省調査〔12, 昭和33年度〕やNHK文研調査〔7, 1969〕等で3年生よりも5年生の視聴量が多いという結果がでていて、最も多くテレビを見る学年が若年化の傾向を示している。

このことは、福島県内の子ども1,561名について調べた島田の研究〔11〕や1975年に調べた筆者の研究〔3〕の結果と一致している。

3) 性別の比較では、全学校・全学年でVA・VHいずれも、男子が女子よりも大きい数字を示している。このような、男の子が女の子よりも多くテレビに接しているという結果は、これまでの諸調査研究結果と同じ傾向を示したものと言える。

(2) 視聴態度尺度値(VA)・視聴時間量(VH)の全体平均値と相関関係

VAとVHについて、有効サンプル全体923名の平均値を求めたところ、次のような数字を示している。

	VA	VH
平均値	1.8657	2.9144
標準偏差	0.8494	1.4424
変動係数	45.5%	49.5%
相関係数	0.278***	

(0.1%レベルの有意性)

VAとVHの相関関係については、この態度測定尺度を用いたこれまでの諸調査〔3・4〕でも高い係数を示しているけれども、今回の調査結果でも0.1%レベルの有意性をもって高い相関関係を示した。

(3) 学校間の差の検定

第1表の結果のうち、学校間の平均値に差があるか否か、等分散性の検定を行なった後に、平均値の差の検定を行なった(t検定)。第2表がその結果である。

第2表 平均値の差の検定(t検定)

	松園(A1)	桜城(A2)	御明神(A3)	西根(A4)
松園(A1)				
桜城(A2)	0.846 0.506			
御明神(A3)	5.984*** 4.834***	6.725*** 4.523***		
西根(A4)	4.520*** 0.011	4.943*** 0.285	0.016 3.444***	

(上段はVA, 下段はVHについてのtの値)

第3表 要因別の水準毎平均値・相関係数

()内の数字は標本数

学年 (C)	3年(C1)(240)		4年(C2)(214)		5年(C3)(252)		6年(C4)(217)		
	相関係数	0.2052**		0.2281***		0.2970***		0.3613***	
平均値(VA・VH)	2.056	3.039	1.951	3.004	1.711	2.833	1.753	2.784	
標準偏差(VA・VH)	0.888	1.335	0.851	1.434	0.809	1.463	0.797	1.521	
変動係数(VA・VH)%	43.172	43.947	43.618	47.751	47.251	51.629	45.538	54.645	
意志 力 (E)	+ (E1)(373)		0 (E2)(342)		- (E3)(208)				
	相関係数	0.2192***		0.3156***		0.1958**			
	平均値(VA・VH)	1.648	2.627	1.985	3.079	2.061	3.159		
	標準偏差(VA・VH)	0.790	1.357	0.870	1.478	0.832	1.444		
変動係数(VA・VH)%	47.924	51.643	43.819	48.081	40.387	45.706			
知 能 (F)	上 (F1)(315)		中 (F2)(376)		下 (F3)(232)				
	相関係数	0.2901***		0.2887***		0.2130***			
	平均値(VA・VH)	1.650	2.757	1.966	2.884	1.995	3.177		
	標準偏差(VA・VH)	0.782	1.314	0.886	1.497	0.820	1.482		
変動係数(VA・VH)%	47.381	47.669	45.049	51.889	41.099	46.661			
学力 (算数) (H)	上 (H1)(261)		中 (H2)(303)		下 (H3)(359)				
	相関係数	0.3367***		0.2642***		0.2105***			
	平均値(VA・VH)	1.693	2.642	1.804	2.889	2.043	3.134		
	標準偏差(VA・VH)	0.814	1.373	0.829	1.461	0.858	1.440		
変動係数(VA・VH)%	48.089	51.963	45.956	50.570	42.004	45.957			
学力 (社会) (I)	上 (I1)(327)		中 (I2)(296)		下 (I3)(300)				
	相関係数	0.3465***		0.2844***		0.1520**			
	平均値(VA・VH)	1.639	2.679	1.878	2.963	2.101	3.123		
	標準偏差(VA・VH)	0.790	1.393	0.833	1.435	0.862	1.466		
変動係数(VA・VH)%	48.199	52.003	44.348	48.426	41.048	46.921			
母の 保育 (L)	専 (L1)(538)		非専(L2)(385)						
	相関係数	0.2418***		0.2853***					
	平均値(VA・VH)	1.721	2.751	2.067	3.143				
	標準偏差(VA・VH)	0.794	1.465	0.882	1.378				
変動係数(VA・VH)%	46.136	53.248	42.684	43.853					
性 別 (N)	男 (N1)(467)		女 (N2)(456)						
	相関係数	0.2532***		0.2658***					
	平均値(VA・VH)	1.985	3.187	1.744	2.635				
	標準偏差(VA・VH)	0.864	1.463	0.816	1.365				
変動係数(VA・VH)%	43.532	45.911	46.820	51.808					
家 庭 レ ビ デ オ 台 数 (P)	1台(P1)(415)		2台(P2)(384)		3台以上(P3)(124)				
	相関係数	0.2710***		0.2926***		0.2100*			
	平均値(VA・VH)	1.794	2.721	1.905	3.074	1.984	3.069		
	標準偏差(VA・VH)	0.824	1.426	0.884	1.437	0.802	1.434		
変動係数(VA・VH)%	45.919	52.405	46.406	46.758	40.401	46.737			

これによると、前述のような都市校と農村校の間の差が、統計的に明確にされた。とくに、VAについては、はっきりした傾向を示している。

(4) 要因別にみた平均値の傾向

諸要因のうち、学年C・意志力E・知能F・学力(算数)H・学力(社会)I・母の保育L・性別Nの7要因については、後述の分散分析結果からも、VA・VHに大きな影響を及ぼしているものと言える。そこで、これらの諸要因別にVA・VHの平均値と相関関係を、各水準別に示したものが第3表である。

第3表から明らかにされた傾向を列挙してみると、次のようになる。ただし、学年別・性別については前述したので、ここではふれない。

- 1) 各要因・各水準別のすべての項においてVA・VHの間に有意な相関関係が認められた。
- 2) 意志力の強い子ども達のVA・VHは、弱い子ども達のそれよりも少ない。
- 3) 高知能群よりも低知能群のVA・VHが高い。
- 4) 学力についてみると、算数・社会ともに、上位群よりも下位群のVA・VHが高い。
- 5) 母が保育に専念しているかそれとも共働きなどで不在であるかの分類においては、保育に専念している群のVA・VHが、かなり低い数字を示している。
- 6) 家庭におけるテレビ台数が多くなるに従い、VA・VHが高くなる傾向を示している。
- 7) 第4表は、家庭における視聴統制Oという要因のうち、きまりの統制と小言の統制という2つの水準のみをとりあげて、VA・VHの比較を行なったものである³⁾。

この2つの統制群の平均値VA(1.731—2.047)・VH(2.577—3.329)の間には、t検定の結果、夫々0.1%レベルの有意差が認められた。

従って、家庭におけるテレビ視聴のあり方について親が指導(統制)を加える場合、その都度小言的に注意をするよりも、時間や番組をきめてみせるという指導の方が効果のあることが明らかになった。

なお、いずれの統制も行わない放任型の家庭の子ども群は、サンプルサイズが小さかったため表には提示しなかったけれども、VHについてみると小言の統制群とほぼ同じで差がなく、きまりの統制群と有意差をもって長時間テレビを視聴していた。

これらの点からも、きまりの統制の有効性が検証されたのである。

以上5)～7)の分析からもわかるとおり、児童のテレビ視聴に大きな力をもつ要因は家庭で

第4表 家庭における視聴統制のあり方

視 聴 統 制 (O)	相 関 係 数	きまりの統制 (O1) (465)		小言の統制 (O2) (354)	
		0.2837***		0.1776**	
	平均値 (VA・VH)	1.731	2.577	2.047	3.329
	標準偏差 (VA・VH)	0.828	1.353	0.841	1.435
	変動係数 (VA・VH)%	47.825	52.490	41.090	43.105

3) 視聴統制Oのみを第4表にとり出して比較したのは、4水準のとり方に問題があり、とくにこの2つの水準のみで比較する必要があったためである。

あり、母親の果す役割とくに、子どもが小さいときからの指導と習慣づけの重要性が改めて確認されたのである。

(5) 5元配置分散分析の結果

次に、どの要因がどの程度にVA・VHの値に影響しているかを調べるために、次の11要因について5元配置分散分析を行なった。

- B 地域
- C 学年
- D 性格（自主性）
- E 性格（意志力）
- F 知能
- H 学力（算数）
- I 学力（社会）
- K 老人の有無
- L 母の保育
- N 性別
- P テレビ台数

その結果、主効果と2因子交互作用に有意性を認められたものをまとめたのが第5表(VA)と第6表(VH)である。

以下、第5表・第6表からの考察結果をまとめてみる。

1) 諸要因のいろいろの組合せに共通して、VA・VHいずれにも主効果として有意にはたらいっているのは、地域B・性別N・母の保育Lの各要因である。

2) VAに関しては、とくに、知能F・社会の学力I・意志力Eの各要因が強く影響している。

3) VHに関しては、家庭におけるテレビの台数Pの要因が、F・K・L・N・PとI・

第5表 VAに関する5元配置分散分析結果

要因	地	学	自	意	知	算	社	老	母	性	テ						
	域	年	主	志	能	数	会	人	の	別	レ	B	F	F	L	K	E
組合せNo.	B	C	D	E	F	H	I	K	L	N	P	N	K	L	N	L	F
1	25 ***				4 *			✓	4 *	3 *		3 +	6 **	2 +	3 *	✓	
2	26 ***					✓		✓	3 *	5 *		✓			✓	✓	
3		11 ***			5 **			✓	18 ***	4 **			2 +	2 +	2 *	1 +	
4			✓	5 *				✓	13 ***	7 **					5 *	✓	
5			✓		7 **			✓	19 ***	13 ***			✓	✓	5 **	✓	
6			✓				14 ***	✓	14 ***	14 ***					6 **	2 *	
7				7 **	4 *			✓	15 ***	3 *			4 *	5 *	5 **	✓	5 *
8					4 *		13 ***	1 +	18 ***	12 ***			✓	✓	9 ***	✓	
9					4 +			✓	16 ***	4 *		✓	✓	✓	4 *	✓	
10							13 ***	✓	13 ***	10 ***		✓			3 *	✓	

注) 1) 数字は寄与率(%) 小数点以下四捨五入
 2) 数字下の記号はF-testの結果 (+:危険率10%)
 (✓:有意性無し)

第6表 VHに関する5元配置分散分析結果

要因 組合せ No.	地	学	自	意	知	算	社	老	母	性	テ												
	域	年	主	志	能	数	会	人	の	別	レ	ビ	B	F	F	L	K	B	B	F	I	K	
	B	C	D	E	F	H	I	K	L	N	P	N	K	L	N	L	H	L	N	L	N	N	
1	5*				∇				2+	7**		∇	8*	∇	∇								
2	16***					∇		∇	∇	13***		∇		∇	∇	9**	3+						∇
3		∇			∇			∇	14***	18***			7**	∇	∇	∇				3*			2+
4			∇	4+				∇	6*	12**				∇	∇	∇							∇
5			∇	∇	∇			∇	5*	15***			∇	∇	∇	∇					∇		∇
6			∇				∇	∇	9**	15***				∇	∇	∇					5*		3*
7				∇	∇			∇	10**	11**			∇	∇	∇	∇				∇			∇
8					∇		∇	∇	14***	19***			8**	∇	∇	∇				4*	3*		∇
9					∇			∇	8**	10**	5*		∇	4+	∇	∇				∇			∇
10							4*	∇	7**	20***	6*				∇	∇					∇		∇

K・L・N・Pの2つの組合せにおいて有意にはたらいしていることがわかる。

4) 交互作用についてみると、VAに関して全般的傾向として言えることは、母の保育Lと性別Nの交互作用が強いはたらいしていることである。

(6) 長時間視聴児の分析

第1図は、これまで述べてきた調査対象児童全体のVA・VHについて、累積相対度数を対数正規分布紙上にプロットしたものである。

この図から直ちに気がつくことは、VA・VHともに直線上近くにきれいにプロットされ、対数正規分布に従っていると言い得ることである。

さらにVAの場合は尺度値2.5000のところ、VHの場合は3.00時間のところで折れ曲った直線の組合せであり、分布が2層に分れていることに気づく。つまり、VHについてみると、視聴時間量3時間以上の子どもとそれ以内の子どもの間に、諸特性のちがいがあるのではないかと考えられる。

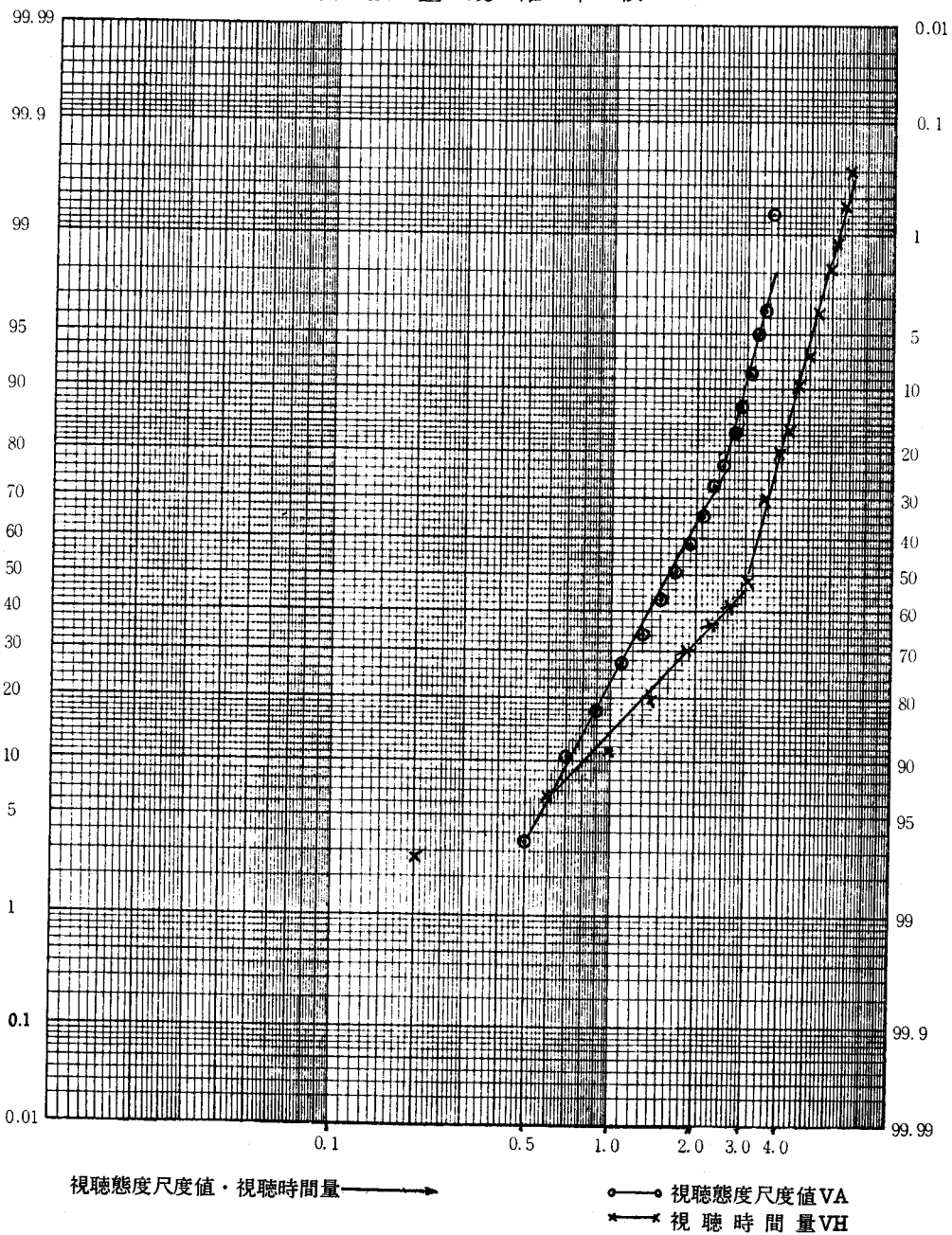
Himmelweitらの研究以来、テレビの子どもらに与えるマイナス影響は、テレビを見すぎる長時間視聴児に多くあらわれることが指摘されている。また、昭和33年の文部省調査以来、わが国においても、1日3時間以上テレビを見る子どもを長時間視聴児として論じており、とくにテレビのマイナス影響が複雑にあらわれる児童群として問題にされてきた。

そして、上に述べた今回の調査結果から、3時間を基準として区別する意味が、統計的に根拠づけられたと言える。

そこで、以下、とくにこれら長時間視聴児のみを取りあげて分散分析を行い、VA・VHにかかわる諸要因との関係に、どのような特徴があるかを明らかにしようと考えた。

第7表は、長時間視聴児のVAについて4元配置分散分析を行い、誤差項の寄与率50%以下

對數正規確率紙



のものを一覧表にまとめたものである。

この表から、次の2点を指摘できる。

1) 調査児童全員を対象に分散分析を行なったものに比べて、性別Nの寄与率が下がり、意志力E・母の保育L・老人の有無Kの寄与率の高いのが目立つ。すなわち、VAについては、長時間視聴児の場合、男女差よりも意志の力とか母親の目が届いているか否かの方が大きく影響している。

2) また、交互作用の有意にはたらくケースが多くなり、それだけ長時間視聴児の視聴行動構造が複雑になっていると考えられる。

次に、第8表は、同じく長時間視聴児のVHについて4元配置分散分析を行い、それをまとめたものである。この表に見られる特徴の主なものは、次の2点である。

1) 学力(社会)I・母の保育Lの主効果に有意性が認められなくなり、意志力Eや知能Fの寄与率が高くなっている。すなわち、長時間視聴児の視聴時間量には、意志力・知能の影響の強いことがわかる。

2) 母の保育Lの主効果が弱くなったのに対して、意志力×母の保育(E×L)や学力(社会)×母の保育(I×L)の交互作用が高い寄与率を示している。

以上、長時間視聴児のみについて分析してみると、主効果が強く寄与している全児童の傾向に対して、2要因の交互作用の影響が高く、従って視聴行動の構造がより複雑になっていること、さらに意志力の影響が強いはたらいっていることが特徴的に示されている。

9 まとめ

923名の有効サンプルについて、テレビ視聴態度尺度値(VA)と視聴時間量(VH)の測定結果を分析したところ、次のようなことが明らかになった。

- 1) 全体的にVAとVHの相関関係が高い。
- 2) 都市よりも農村の子どものVA・VHが高い数字を示す。
- 3) 5～6年生よりも3～4年生の方が、VA・VHとも高い。つまり、テレビ視聴量ピークの若年化の傾向がある。
- 4) 男子は女子よりも、VA・VHが高い。
- 5) 母の保育・知能・学力・意志力などが、VA・VHに大きく寄与している。
- 6) 子どものテレビの見方について、親が全く放任している家庭の子どもらは視聴量が多く、きまり的統制を行なっている群には、小言的統制群や放任型の群よりも、望ましい視聴態度が形成されている。
- 7) 長時間視聴児は他の子どもらに比べて、VA・VHに対する諸要因のかかわり方にかなりちがいがあり、視聴行動の構造がより複雑になっていることが明らかになった。

II 映画によるテレビ視聴態度形成の実験的研究

1 問題

I部で述べたように、約1,000名の児童を対象に家庭におけるテレビ視聴実態を調査したところ、次のような諸点が注目をひいた。

- (1) 小学校3～4年生の児童の平均テレビ視聴時間量VHは、3時間以上という数字を示し

ている。

また、これまでの調査〔3〕からもわかるように、1日3時間以上テレビを見るいわゆる長時間視聴児が、小学校中学年に30%ぐらいいる。

(2) 視聴態度尺度値VAや視聴時間量VHに影響を及ぼす諸要因の分析結果では、意志力の寄与率が高く、このことから、意志の弱い子どもに長時間視聴の傾向が強いことが明らかにされた。

(3) さらに、児童のテレビ視聴に影響を及ぼす家庭環境の要因のうち、「きまり的統制」という型の親の指導が、VA・VHに大きなかわりをもつことが明らかにされた。

以上の3点から言えることは、今日の子ども達、とくに小学校中学年の児童は、テレビの麻薬的魅力にとりつかれて困っているということ、そして、これらの児童に対して、正しいテレビ視聴態度を形成してやる必要があるという点である。

そこでⅡ部においては、筆者がこれまで研究を続けてきた映画による態度変容の知見をとり入れて、映画によるテレビ視聴態度の形成を意図し、そのための実験的研究を試みた。

とくに、1975年の研究〔4〕では、社会教育用映画「こわれたテレビ」によってこれを意図したが、今回は、この研究のために特別に意図して作られた小学生向道徳教育用教材映画「テレビに泣かされたボク」を用いて、テレビ視聴態度形成の効果を実証しようとした。

2 研究の目的

家庭における望ましいテレビ視聴態度形成を目的として作られた道徳教育用教材映画「テレビに泣かされたボク」(東映教育映画部作品、カラー20分)の使用によって、児童の視聴態度と視聴時間量がどのように変化するかを明らかにする。

3 仮 説

(1) 同一学年(4年生)の主人公に ego-involvement を感じさせ、同時に主人公の良心をあらわすもう一人の主人公(二役)の目を通して、客観視させる手法をとった映画「テレビに泣かされたボク」は、児童のテレビ視聴態度を変容し、事後のVAとVHに変化をもたらすであろう。

(2) その変容は、2週間後と2ヶ月後まで持続するであろう。

4 調査用具

- (1) テレビ視聴態度測定尺度 (いずれもⅠ部のものと同じ)
- (2) テレビ視聴時間量調査

5 調査対象

盛岡市立厨川小学校4年生 4学級 147名

盛岡市立城南小学校4年生 4学級 168名

これまでの研究で、今日最も多くテレビを見ていると言われている小学校4年生を対象として、望ましいテレビ視聴態度の形成をはかろうとした。

6 調査方法

実験群（映画群） 各学校 2学級

対照群（非映画群） 各学校 2学級

7 調査手続

		映 画 群	非 映 画 群
昭和51年9月10日(金)	事 前 調 査	尺 度 A と 時 間 量 調 査	
同 年 9 月 16 日 (木)	映 画	映 画 と 尺 度 B	
同 年 9 月 17 日 (金)	事 後 調 査	時 間 量 調 査	尺 度 B と 時 間 量 調 査
同 年 10 月 1 日 (金)	2 週 間 後 調 査	尺 度 C と 時 間 量 調 査	
同 年 11 月 5 日 (金)	2 ケ 月 後 調 査	尺 度 A と 時 間 量 調 査	

8 使用した映画

道徳教育用教材映画「テレビに泣かされたボク」（東映教育映画部作品カラー20分，石川桂司監修）

小学校3～6年生対象の作品で，学習指導要領道徳編の内容5「時間を大切に，きまりのある生活をする」をねらいとする主題の場合，中心資料として利用できる教材である。

（内容）

・テレビに振り回される生活を送る俊夫

小学校4年生の俊夫は，朝起きるとすぐにテレビのスイッチを入れ，朝食もテレビを見ながら食べるテレビっ子である。学校から帰ってくるとかぼんを放り出し，何時間でもテレビにしがみつく。1にテレビ，2にテレビ，3・4もテレビで，5に勉強の毎日であった。

・まに合わなくなるお面づくり

俊夫はお楽しみ会の劇で使うお面を，日曜日迄に作ることを友達と約束するが，まだ日があるからとお面作りをほうり出し，テレビにしがみついていた。約束の日が翌日に迫っても，学校から帰ってきてテレビを見ていた。

夜になり，再びお面づくりを始めても作業は進まず，俊夫は絶望的な気分になり，目からは大粒の涙が伝い落ちる。その時，別の俊夫（俊夫の良心）があざ笑うように現われる。そして「もっと自分できまりをつけ，テレビは見たいものだけにすれば」と忠告するが，俊夫は「テレビはどれを見てもおもしろいので，次から次に見たくなるのが人情さ」と反発する。

・お面づくりに協力する家族

11時を過ぎたので，両親より寝るようにといわれた俊夫は，作業が進まずいららしていたので，「約束だから作るのだ」と言い，激しく泣き出す始末である。両親も，今更いってもしょうがないとあきらめ，母親は新聞紙の重ね張りをし，姉はお面をかわかし，俊夫は寝ぼけまなこで虎のしま模様を絵の具でかき，父親はニスで上塗りをするなど，家族の共同作業が始まった。父親がニスをかわかす頃には夜もふけ，俊夫をはじめ姉も母までも，コックリコと居眠りをはじめたのだった。

・自分で作らないお面に恥じる俊夫

明るく日曜日の午後、徹夫の家に素江と俊夫と芳子が集まった。芳子は半成品のお面をみんなに見せ「1日、待ってほしい」とあやまる。徹夫と素江は「みんなで手伝って作ってしまえば簡単だ」というが、芳子は「自分の作ったものでなければ」とことわる。

俊夫は突然「おれ、また来る」と虎のお面を持って走り出し、お面を小川に投げ入れてしまう。川下で俊夫を捜していた徹夫たちがそのお面を拾いあげ「こんなによくできたお面が台なしではないか」となじる。

俊夫はそのお面を奪い取り「おれのお面じゃないんだ」とめっちゃめっちゃに踏んづけてしまう。そして「テレビばかり見て自分で作れず、家族の人達が殆ど作ったものだ。芳子さんのように正直にあやまれなかった」と反省すると共に、友達にもわびた。

・視聴番組を決めるテレビ同盟

だれもがテレビを見すぎた経験があるので、テレビ同盟をつくり、毎日、2時間ぐらいをめぐりに見たい番組を4人がノートに書き出し、各自で守り合おうと、素江が提案する。

約束をやぶれば、今日の俊夫君のお面みたいに、自分で自分がいやになってしまうから、しっかり守り合おうと申し合わせた。

家に帰った俊夫は、同盟で約束したテレビ番組を見ていた。別の俊夫（俊夫の良心）が心配そうに眺めていると、番組を見終わった俊夫はすっと立ちあがり、パチッとスイッチを切り、「さあて、勉強、勉強」と、満足そうな表情で鉛筆をにぎり、勉強を始めるのであった。

9 実験結果とその分析

前述のように、この研究では、盛岡市内の住宅地域にある厨川小学校と城南小学校の2校を対象に実験を行なった。しかるに、映画と事後調査の行われた9月中旬には、丁度、城南小学校の学区内にある盛岡八幡宮の祭典が行われた。この神社は盛岡の氏神であり、市内一にぎわう祭が3日間にわたって行われる。そして、各町内から山車が多く出て、たくさん子どもらが山車の上の太鼓打ちや行列に動員される。そこで、事前調査が行われた9月上旬から事後調査の行われた中旬にかけて、城南小学校児童の多くが夜遅くまで、男女ともに、この祭りの準備や本番に参加した。山車に関係していなくとも、事後調査の前日、つまりテレビ視聴時間を調べた9月16日（木）には、ほとんどの子どもらが祭を見に出かけている。

これらの事情から、この時期、城南小学校の子どもらの多くは祭を中心とした生活時間を過しており、テレビの視聴時間は極端に少なくなっているために、調査のデータとして信ぴょう性の少ないものと言わざるを得なかった。このために、調査は実施したものの、分析の対象からは除外せざるを得なかった。

そこで、第9・10表にあげたように、調査結果の分析は、厨川小学校の児童に対してのみ行なった。

以下、その結果について分析を試みる。

(1) 各群の男・女・計の4回にわたる調査のすべてにおいて、視聴態度尺度値VAと視聴時間量VHの間の相関関係が強く認められ、0.8~0.9の高い相関係数を示している。

(2) VAについて映画群と非映画群を比較してみると、非映画群には4回にわたる測定値すべてに全く変化がみられない。これに対して映画群の場合は、減少傾向が認められ、男子と計については直後と2ヶ月後の調査結果にかなりの減少が認められた ($P < 0.1$)。

第9表

		映 画 群			非 映 画 群			長時間視聴児	
		男	女	計	男	女	計	映 画 群	非映画群
調査対象児童数(全回出席)		36	28	64	35	28	63	35	41
事前調査 S.51. 9. 10.	平均態度尺度値	2.1860	2.0935	2.1455	1.9745	2.1132	2.0362	2.2629	2.2365
	標準偏差	0.8897	0.8247	0.8631	0.7316	0.8295	0.7796	0.8030	0.7901
	平均視聴時間量	3.66	3.45	3.57	4.09	3.26	3.72	4.71	4.64
	標準偏差	1.45	1.70	1.56	1.59	1.44	1.58	1.10	1.07
	相関係数	0.89	0.86	0.88	0.91	0.89	0.89	0.94	0.92
事後調査 S.51. 9. 17.	平均態度尺度値	1.8142	1.9070	1.8548	1.8609	2.2617	2.0391	1.8081	2.1816
	標準偏差	0.7950	0.7887	0.7806	0.7723	0.7382	0.7829	0.8044	0.7354
	平均視聴時間量	3.29	2.62	3.00	3.49	2.65	3.12	3.59	3.51
	標準偏差	1.35	1.23	1.34	1.46	1.37	1.47	1.20	1.53
	相関係数	0.85	0.82	0.83	0.87	0.87	0.85	0.85	0.86
2週後調査 S.51. 10. 1.	平均態度尺度値	1.8866	2.1157	1.9868	1.9507	2.2244	2.0724	1.9895	2.2056
	標準偏差	0.8587	0.9431	0.9039	0.7566	0.8428	0.8075	0.9092	0.7794
	平均視聴時間量	3.12	3.08	3.10	3.51	3.26	3.40	3.63	3.94
	標準偏差	1.54	1.35	1.47	1.62	1.45	1.55	1.33	1.30
	相関係数	0.87	0.84	0.85	0.85	0.91	0.87	0.91	0.88
2ヶ月後調査 S.51. 11. 5.	平均態度尺度値	1.7997	1.9519	1.8663	1.9056	2.1803	2.0277	1.8152	2.2653
	標準偏差	0.7246	0.7921	0.7586	0.8495	0.8414	0.8568	0.8098	0.7511
	平均視聴時間量	3.25	3.16	3.21	3.54	3.21	3.39	3.60	3.68
	標準偏差	1.46	1.42	1.45	1.57	1.10	1.40	1.44	1.48
	相関係数	0.89	0.84	0.87	0.89	0.94	0.91	0.89	0.90

第10表

	男				女				全 体				長 時 間 視 聴 児				
	事 前	事 後	2 週 後	2 ヶ 月 後	事 前	事 後	2 週 後	2 ヶ 月 後	事 前	事 後	2 週 後	2 ヶ 月 後	事 前	事 後	2 週 後	2 ヶ 月 後	
映 画 群	態度尺度値	2.1860	1.8142	1.8866	1.7997	2.0935	1.9070	2.1157	1.9519	2.1455	1.8548	1.9868	1.8663	2.2629	1.8081	1.9895	1.8152
	視聴時間量	3.66	3.29	3.12	3.25	3.45	2.62	3.08	3.16	3.57	3.00	3.10	3.21	4.71	3.59	3.63	3.60
非 映 画 群	態度尺度値	1.9745	1.8609	1.9507	1.9056	2.1132	2.2617	2.2244	2.1803	2.0362	2.0391	2.0724	2.0277	2.2365	2.1816	2.2056	2.2653
	視聴時間量	4.09	3.49	3.51	3.54	3.26	2.65	3.26	3.21	3.72	3.12	3.40	3.39	4.64	3.51	3.94	3.68

(265)

映画による態度変容についての研究(5)

この点から、VAについては、仮説(1)がはっきりと検証できたと言える。

(3) VHについてこれをみると、映画群・非映画群ともに減少傾向が認められた。とくに、事前調査と事後調査の間には、両群ともに1%レベルの有意差が認められる。ただ、映画群の場合は、この減少傾向が定着する傾向を示している。

事後調査の結果が両群とも著しく減少している理由としては、映画—非映画という要素のほかに、視聴時間を調べた日の天候も影響しているようである。ちなみに、4回にわたる調査日の天候を調べてみると、次の通りである。

事前調査(9月9日) 雨

事後調査(9月16日) 晴

2週間後調査(9月30日) 晴

2ヶ月後調査(11月4日) 雨

すなわち、事前調査は日の長い夏季で、子どもらが下校後、外で遊ぶ時間が多い時期であるにもかかわらず、当日は雨のために、両群とも家の中にいてテレビを視聴する時間が長かったと思われる。これに対して、事後調査の日には晴天に恵まれたため、戸外で遊ぶ時間が多く、そのためにテレビ視聴時間量は全般的に減少したものと思われる。

このように、VHの事後調査結果に両群とも差が生じたのは、映画—非映画という要素のほかに、天候や季節による日中の生活時間構造の影響によるようである。

それにしても、映画群の減少傾向が強く(男子と計)、しかも定着が認められることから、VHに関しても仮説(1)の効果が一応認められたと言える。

(4) これまでに述べた仮説(1)(2)の傾向は、とくに両群の長時間視聴児(事前調査のVHが3時間以上の児童)のみをとりあげて比較したとき、よりはっきりと認められた。

すなわち、映画群の場合はVA・VHともに有意差をもって減少傾向が認められ、それが2週間・2ヶ月後にも定着している。

つまり、長時間視聴児に関してとくに映画の効果が明瞭にあらわれ、仮説(1)(2)ともに検証されたことになる。

この点、非映画群の場合は、VAには全く変化が無く、前述のような天候の影響の強くはたらくVHにのみ変化が認められたのである。

10 まとめ(考察)

視聴時間量VHについては、天候などの影響で非映画群にも減少傾向が認められたため、映画の効果のみを明瞭に指摘することはできなかった。けれども、映画群では視聴態度尺度値VA・視聴時間量VHとも、事後調査からはっきり減少傾向を示し、映画の効果を検証し得た。

とくに、長時間視聴児の分析から、映画の効果を確認することができた。

つまり、今日最も長い時間テレビを見ている4年生の子どもらは、映画の主人公(俊夫)がテレビの魅力にとりつかれている姿、そして友達との約束を守れずに困り悩みはてしている姿、その事件を通して深く反省している姿に自分を見出す。そして、友達といっしょに正しいテレビの見方をすすめようとしている姿に共感することによって、自分のテレビ観が変化し、視聴行動が変わっていくものと考えられる。

なお、映画の構成内容、すなわち、主人公とのego-involvementと態度変容過程の分析、さらには映画を利用した指導の要素など、今後、条件を統制して細かく分析をすすめなければ

ならない問題が多い。けれども、今回の実験では、単に映画を見せる見せないという条件のみでその効果を調べることにとどめた。

また、映画の効果を純粋なかたちで検証するために、今後の研究では、天候・季節の要因を加味して検討することが必要と思われる。

〔後記〕

この研究は、放送文化基金より研究費を助成された「テレビ視聴態度研究会（代表石川桂司）」の研究「児童のテレビ視聴態度に関する総合的研究」の一部として実施したものである。

参 考 文 献

- 1) Himmelweit, H. T., Oppenheim, A. N. & Vince, P. ; Television and the Child, Oxford Univ. Press, 1958
- 2) Schramm, W., Lyle, J. & Parker, E. B. ; Television in the Lives of Our Children, Stanford Univ. Press, 1961
- 3) 石川桂司；家庭におけるテレビ視聴態度——測定の試み——，視聴覚教育，29巻12号，24—27，日本映画教育協会，1975
- 4) 石川桂司；映画による態度変容についての研究(4) ——テレビ視聴態度の形成 その1 ——，視聴覚教育研究 第7号，1—20，日本視聴覚教育学会，1976
- 5) 石戸 順；子どものテレビをどうする，啓隆閣，1976
- 6) 岩佐京子；テレビに子守りをさせないで，水曜社，1976
- 7) NHK総合放送文化研究所；子どもの生活とテレビ(第I・II部16報告)，1969～1971
- 8) NHK放送世論調査所；国民生活時間調査——昭和48年度——，日本放送出版協会，1974
- 9) エブリン・ケイ；子どものテレビはこれでよいのか(奥田・鈴木共訳)，聖文舎，1976
- 10) 子どもの文化研究所；子ども・教育とテレビ黒書，労働旬報社，1976
- 11) 鳥田啓二；児童のテレビ家庭視聴と生活指導(1)，福島大学教育学部論集23—3，1971
- 12) 文部省；テレビジョン影響力調査，1958～1962
- 13) 依田 新編；テレビの児童に及ぼす影響，東大出版，1964

<資料>

家庭調査票

(岩手大学テレビ視聴態度研究会)

この調査は、お宅でのテレビ視聴状況について、お母さま方にお書きいただくものです。お忙しいところ恐縮に存じますが、子どもとテレビについての学術的調査として行われるものですので、よろしくご協力をお願いします。

なお、この調査はお子さまの成績とはまったく関係ありませんし、この用紙を他人に見せたり公開したりすることは絶対にありませんから、ありのままをお答えください。

_____の欄には、字句をご記入頂き、番号には、あてはまるものに○をつけてください。

- 問 1. お子さまについて：_____小学校_____年_____組 なまえ：_____ 1. 男
2. 女
- 問 2. この用紙に記入された方：なまえ：_____ 続柄：1. 母、2. 父、3. その他、
- 問 3. お宅の家族数は、全部で何人ですか _____人
- 問 4. お宅には、お年寄りがいますか：1. いる、2. いない
- 問 5. お宅では、お子さんが学校から帰つたとき、お母さんが家におられますか
1. いつもいる 2. いないことが多い
その理由 1. 動めているため不在
2. 農作業のため不在
3. 店の仕事に従事している
4. その他(_____)
- 問 6. お宅のテレビは、きのう(月 日)何時間ぐらいスイッチがついていましたか。
家族がみんなで見ていた時間、あるいは、誰も見ていなくてもスイッチがついていたならその時間もすべて合計してお答えください。(2台以上あるときは、お子さんが主として見るテレビについて書いてください)
1. 1時間以内 5. 4時間～5時間
2. 1時間～2時間 6. 5時間～6時間
3. 2時間～3時間 7. 6時間～7時間
4. 3時間～4時間 8. 7時間以上
- 問 7. お宅では、お子さんに次のような注意をすることがありますか。(注意する人はだれでもよい)
(1)「テレビを見すぎているから、もうやめなさい」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
(2)「テレビを見るのをやめて勉強しなさい」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
(3)「テレビを見るのをやめてお風呂にはいりなさい」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
(4)「そんなにしてテレビをみると目がわるくなりますよ」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
(5)「くだらない番組をみるのはやめなさい」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
(6)「そんなテレビのまねはよしなさい」
1. よくある 2. ときどきある 3. ほとんどない
- 問 8. お宅では、子どもにテレビを見せるとき、見せ方についてのきまりがありますか。
1. とくに無い
2. 時間をきめて見せている
3. 番組をきめて見せている
4. 勉強をすませてから見せている
5. 食事のときは見せないようにしている
6. その他(_____)
- 問 9. お宅にあるテレビの台数は、カラーテレビ_____台、白黒_____台、計_____台。